

RING

Vol. 30

2012年10月発行

回収・再生・再利用の環を完成させるためのツールということで誌名を「RING」としました。
これはリサイクルが始まっていることを意味する「R・ING」からイメージしたタイトルです。

Interview

再利用品市場の拡大に向けて

2-3

グリーン購入ネットワーク 専務理事・事務局長 麴谷 和也氏



<聞き手>

東洋製罐株式会社
凸版印刷株式会社
株式会社吉野工業所
PETボトルリサイクル推進協議会

塚原 善樹
横尾 耕一
田中 文典
戸川 陽一

Contents

- 資源循環型社会形成を目指して ～市町村紹介～ [愛知県豊田市／千葉県松戸市] 4-5
 - 再商品化事業者紹介 [リソースガイア株式会社] 6
 - 会員企業訪問 [宝酒造株式会社 松戸工場] 7
 - 再生樹脂利用事業者紹介 [カルピス株式会社] 8
- INFORMATION／編集後記

再利用品市場の拡大に向けて

グリーン購入ネットワーク 専務理事・事務局長 麴谷 和也氏

—グリーン購入ネットワークの歩みについてお話しください。

環境への負荷が小さい製品やサービスの優先的購入を進める全国ネットのグリーン購入ネットワーク（以下GPN）は、1996年2月に環境省からの呼びかけに応じて組織されました。2000年4月のグリーン購入法公布以前より活動を行っています。グリーン購入は環境と経済の両立を図るチームプレーのため、多くの方に参加していただき、国が定めるグリーン購入法適合品以外にも対象商品を広げています。参加団体も1996年のスタート時は73団体でしたが、現時点では約2,700団体に増加しています。会員の内訳は、企業会員が約8割、行政が1割、民間団体が1割です。行政は47都道府県20政令都市の全てにご参加いただいております、これぐらいの規模で行政に参加いただいている民間の組織は少ないのではないのでしょうか。

—インターネット上での環境配慮型商品のデータベース構築の経緯と、その中でPETボトル再利用品の状況はいかがでしょうか。

グリーン購入の市場を作るためには、消費者が買い支えなければなりません。買い支えるにはどんな商品を買ったらいいのかを消費者が知らなければなりません。そのために、製品情報を出していくことがGPNの根底にありました。しかし、何でも環境配慮商品だというわけにはいきませんので、それぞれの分野の商品や製品群に対して、この製品群にはこういう環境側面が重要でこういう配慮をすべきですね、というガイドラインを作成



麴谷 和也(こうじたに・かずや)
グリーン購入ネットワーク 専務理事・事務局長

コクヨ株式会社 環境マネジメント部長、コクヨビジネスサービス株式会社 取締役を経て2008年より現職。
環境省「平成24年度カーボン・オフセット制度運営委員会」、経済産業省「グリーンエネルギー運営委員会」、産業環境管理協会「カーボンフットプリントコミュニケーションプログラムアドバイザーボード」、日本経済団体連合会「環境自主行動計画 評価委員会」、などの各委員に就任。

し、ガイドラインに準拠した製品サービスの情報を、データベースを通じて提供させていただいています。

ガイドラインを作る際は、産官学民の方々に集まっていたいて、議論しまとめています。ガイドライン作成メンバーは、公募で決めていくのですが、多くのメーカーが自ら参加されます。そして、ガイドラインができると、参加された方は積極的に情報を入れていただけます。当然、その企業には競合他社がいますので、A社を載せたらB社も載せないと負けるよねということで、今の15,000商品になったという背景があるのではないのでしょうか。再生PETで検索すると400近い商品がありましたが、PETボトルリサイクル推奨マーク（以下推奨マーク）の認定商品はまだ少ないようです。

—GPNとPETボトルリサイクル推進協議会との連携はどのようなことが考えられるのでしょうか。

私たちはさまざまなところで取り組み事例を紹介する機会があります。推進協さんもいろんな取り組みをされていますが、これまでの状況を情報発信できる立場にありますので、情報発信で連携を取らせていただくのがいいのではないのでしょうか。

GPNだけで何かできるかというと、私は何もできないと思っています。いろんな方の、いろんな価値を作られている取り組みがあって、いかに連携をして、新たな価値を作り込んでいくことが、次のステージとして重要だと思っています。ですから、推進協さんとも情報発信だけではない連携の在り方も模索したいですね。たとえば、推奨マークについてもGPNとうまく連携して相乗効果が得られるようなことも考えられると思います。

—PETボトル再生利用市場での新たな取り組みである、ボトル to ボトルをどう評価されますか。

ボトル to ボトル（以下B to B）の技術は画期的だと思います。ですから、そういう技術を市場がいかにかにしっかり評価して買い支えるか、あるいはものづくりに活かすかということにつながっていないとだめだと思います。その価値が理解できずに、コストが優先されてしまうところに、広がりスピードが上がらないという理由があると思います。そのためには、情報をしっかりと発信していくことが大切です。

良いことをやっているから情報発信しないのではなく、今は説明責任を求められる時代ですから、定期的に情報を発信し続けなければなりません。PETボトルはワンウェイ容器の中でいちばん普及していますから、何かと批判の対象になりやすいと思います。B to Bのようなリサイクル技術の進歩を、しっかりアピールすることはすごく重要な気がします。

—使用済みPETボトルの海外流出に関しては、どうお考えでしょうか。

回収した使用済みPETボトルは輸出した方が高く買ってもらえるという話を聞いたことがあります。私からすると「何を言っているんだ!」という感じです。地産地消のように、行政が回収したものを、国内でリサイクルできる仕組みを行政がきちんと守っていかないとはいけません。再利用品のメーカーが、原材料をいかに安定的に確保する仕組みをどう作っていくかというのはとても重要です。

使用済みPETボトルはスーパーなどでも回収していますよね。回収されているさまざまな団体を行政がしっかりとめて、地域全体でリサイクルできる仕組みをどう作っていくかを求めているかといけなと思います。そのことは、1メーカーでは出来ません。推進協さんのような業界団体が、行政に対して、国に対して要望を上げていくというのは絶対ありだと思います。

—今後再利用品の拡大へ向けての、課題と展望についてお話しください。

推奨マークが露出すると「このマーク何?」と感じる人が出てきます。そういう出会いの機会をどう作っていくかが課題ですね。GPNでは大学の先生などと連携しながら、小学生中学生に環境教育、いわゆる出前授業を行っています。学校では自然系の環境教育が多く、日常生活で環境負荷がどうかかっているとか、商品を選ぶことで環境負荷を軽減できることなどの社会系の環境教育はあまりありません。日々の生活の中で環境に配慮した商品を選ぶことで環境負荷を軽減することなどを、子供たちに理解をしてもらうようにしています。

推進協さんの取り組みでも、「みんなPETボトル飲料飲んでよね、飲んだ後どうしてる?空になったPETボトルをリサイクルしたら、こんなメリットがありますよ、BtoBについても、こんな



素晴らしい技術があるんですよ。」と教えてあげると、子供たちの目が輝きますよね。日々接するものを例に出してしっかり情報を伝えていくと、子供の心の中には絶対落ちるんですよ。そういうことをくり返することで、子供たちが5年10年先に社会に出てきた時に具体的な行動につながっていくと思います。日本はこのような取り組みについて欧米と比べ10年以上遅れています。環境技術は最先端かもしれませんが、人々のマインドで比較すると、まだまだ格差があります。教育の質をどう高めていくかと言うことをみんなで考えるべきだと思いますね。

また、再利用品として製品に展開して、その製品を消費者がきちんと理解して買うということを、どうつなげていくか。つなげるために、何が必要なのか、ということについて知恵を出さないといけなと思います。そして、その知恵の出し方はライバルで競い合うのではなくて、同じ目的を目指す各メーカーが一緒になってやるのが効率的ですね。また、対外的な広報インパクトを狙って情報発信しましょうとか、コラボレートすることで、取り組みの質を高めたり、露出度を高める時代になってきたと思います。そういう意味で推進協さんが広報誌やホームページを通じて情報発信されることは、とても意味のあることだと思います。



写真左より 横尾、田中、戸川、麴谷氏、塚原



市民と行政の積極的な取り組みで実を結んだ 年中無休の常設資源回収拠点



愛知県 豊田市

根付く高い分別の意識と地域に合った回収方法

豊かな自然、歴史・文化、ものづくり産業の技術集積、農業基盤などさまざまな地域の資源に恵まれた豊田市。「市民力」「地域力」「企業力」の底力を活かし、公正・公平な市政の推進と市民との共働を基本としたまちづくりに取り組んでいます。

豊田市の使用済みPETボトルの分別回収が始まったのは、1997年の容器包装リサイクル法施行の時。当初から、ラベルを剥がして、キャップを取って潰して出すよう啓発し現在に至っています。

回収方法は二つあり、ひとつは、各自治区内にある資源ステーションでの月1回の資源の日の回収、もう一つの方法はスーパーや公共の駐車場などに常設しているリサイクルステーションでの回収です。資源ステーションは現在1,614カ所あり、収集は委託業者で行われています。市が開設しているリサイクルステーションは21カ所あり、年末年始など一部を除いて年中無休の常設の資源の回収拠点となっています。

リサイクルステーションの収集は2005年度の市町村合併で豊田市と合併した地区は委託業者で、旧豊田市は市が回収を行っています。リサイクルステーションには資源ごみの受け入れスタッフが常駐して、細かい啓発活動を行っています。また、国際色豊かな豊田市では通訳を同行しての出前講座や、ポルトガル語・中国語・英語の3カ国語でリサイクルステーションのガイドブックを作るなどの取り組みが行われています。最近回収・処理で困っていることは、PETボトルの中に小さくて潰しにくいものや、ラベルが圧着させてあり剥がしにくいものがあること。「色々なサイズ、形状のPETボトルを作るのではなく、規格を統一し、中間処理をする過程で処理しやすいPETボトルを作って欲しいですね」と森氏。

一貫して指定法人ルートによる再商品化

回収される使用済みPETボトルの量はリサイクルステーションの方が多く、昨年は640トン。資源ステーションは229トンでした。車社会の豊田市。リサイクルステーションの方が生活リズムに合っている様子です。

毎年実施される日本容器包装リサイクル協会のペール品質調査結果では常にAランクの判定。「安易な輸出依存は国内の再生ルートを弱体化させてしまうため、再生経費のほとんどを飲料メーカーなどが負担するという、資源循環のための社会システムは堅持する必要があると考えており、そのためには海外流出はすべきではない。」と大澤氏。指定法人への引渡し状況は、さまざまな業者から使用済みPETボトルの引取りの依頼がある中、豊田市は一貫して指定法人ルートによる再商品化を基本方針として、全量を指定法人へ引き渡しています。

豊田市独自のエコポイント制度

2009年6月1日から始まった「とよたエコポイント制度」。エコファミリー宣言（自分の出来る環境配慮行動を表す）をして行動することで、市独自のエコポイントが貯まるという制度です。2011年12月1日からはリサイクルステーションに資源を持ち込んだり、PETボトル回収機を利用することでもポイントが貯まるようになりました。

豊田市ではグリーン購入の一環として、作業着、帽子、リサイクルステーションにあったPETボトル回収のパック、ゴミステーション用のネット、エコットのボランティア用ベストにPETボトル再利用品を採用しています。

行政の積極的な取り組みと市民の協力を得て、より良い循環型社会へ向けて豊田市は今日も進んでいます。

環境部ごみ減量推進課 専門監兼課長 森 鋼次
同課 係長 大澤 一浩
同課 主査 加藤 康司



写真左より 加藤氏、大澤氏、森氏

豊田市の環境学習



「ハイ！」と元気よく手を挙げ、ごみの量や分別方法について、ハキハキと答えていく子供たち。輝く瞳には、明るい未来が見えました。
eco-T(エコット) 豊田市環境学習施設 <http://www.eco-toyota.com>



市民と行政の協力体制で実施した特徴的な集団回収

千葉県 松戸市

特色ある集団回収

千葉県内では千葉市、船橋市に次いで居住人口3位、48万人の人々が暮らす松戸市。使用済みPETボトルは日本容器包装リサイクル協会のルートで回収されています。

松戸市の使用済みPETボトル回収を特徴付けているのは、集団回収です。これは町会や自治会、子供会などによる資源回収の対象品目に、紙類等・空き缶・ガラスびん類の他にPETボトルがあり、市に登録している467団体がそれぞれ自主的に、25社ある回収業社（うちPETボトルを回収している業者は7社）のいずれかと引き取り契約を結び、回収業者は容器包装リサイクル法に基づく指定保管場所に使用済みPETボトルを運ぶというものです。個別対応という形になりますので、団体毎に回収日や頻度が異なります。使用済みPETボトルの引き取りはごみ集積所横のネットが中心ですが、各戸の軒下から回収していく方式の団体もあります。

これとは別に36あるスーパーなどの協力店舗、一部の公共施設からは市が直営で収集しています。

回収量は2011年度実績で、集団回収1,538トン、行政回収104トン。ペールの品質は、日本容器包装リサイクル協会に基づく総合評価で、Aランクに格付けされています。

PETボトルの集団回収の始まり

1976年に婦人会により集団回収が開始され、以後市内各地区にリサイクル町会が誕生し、市直営車両が拠点で回収していました。その後1978年4月に家庭ごみを3分別から4分別収集に変更し、集団回収と市の資源ごみ収集が併存するようになりました。

町会単位によるリサイクル町会制度は、町会規模拡大等により回収拠点での立ち番など担当役員の負担が大きくなり実施町会数も減少したため、1991年4月にリサイクル町会制度を廃止し、新たな集団回収方式として市直営回収をとりやめ、活動団体と民間回収業者に交付金による支援を行うようにしました。

PETボトルの集団回収は1997年7月から開始しました。これは収集効率などを考えた結果、集団回収の対象品目としてPETボトルを追加したものです。

啓発活動

松戸市ではリサイクル促進やごみ減量の啓発のために、いくつもの取り組みを行っています。そのひとつが市内の資源化施設へのごみツアーです。ふだんは2ヶ月に一度、平日の午前中に実施していますが、夏休みに入ると小学3年生以上の親子を対象に2回行われます。また市の職員によるごみ問題や環境問題などを市民に説明する、出張制の「パートナー講座」(土日にも対応)、松戸まつりや桜まつりでのごみ減量PRなども積極的に行っています。

リサイクルやリユースでシンボルになっているのがマスコットキャラクターの「クリンクルちゃん」。市民の間ですっかりおなじみです。

とはいえ、鍵を握るのは住民の意識。転入者から慣れないシステムに苦情が寄せられる、アパートなど一部の住まいで集団回収が行われないため、協力店へのPETボトルの持ち込み回収に協力して頂かねばならない、などむずかしい部分も見られます。また使用済みPETボトルの回収場所には、決められた日に出す決まりになってはいるものの、収集日以外の日に使用済みPETボトルが出されしまうことも少なくありません。しかしそこで目にするのは、綺麗な状態の使用済みPETボトルが多いとのこと。予め出されているものが綺麗だと、後から捨てる方も気をつけるようになります。

「これからもご理解とご協力をいただけるように、努力をつづけていきます」と担当部署の平松氏。



写真(上) 池田氏、(下)平松氏

市民環境本部 環境担当部 環境業務課 課長補佐 池田 俊彦
同課 ごみを減らす係 係長 平松 富美代



DNAがつなげるリサイクルの大切さ

リソースガイア株式会社

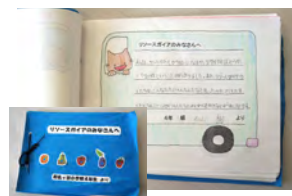
〒270-2231 千葉県松戸市稔台6-10-14
TEL: 047-360-5181(代) FAX: 047-360-5185

松戸市内の使用済みPETボトルを100%引き受け

リソースガイア株式会社は古紙再生企業である新井グループの一員として、1996年に設立されました。松戸市で古紙、缶、びん、PETボトルなどのリサイクル処理を行っています。

同社の特徴のひとつは、松戸市内の使用済みPETボトルを100%引き受け、中間処理をしています。2003年に資源ごみの民間委託を、翌2004年に使用済みPETボトルの選別、保管、委託の一般廃棄物処理施設設置許可証を取得しています。

地元とのつながりが深い分、子供たちや地域住民に理解を求める姿勢は大切にしている部分です。夏休みの自由研究・ごみツアーの受け入れや、学校への出前授業など積極的に行っています。



見学した小学生からのお礼の感謝状

以前は独自ルートで使用済みPETボトルを集める市の資源リサイクルセンターと、日本容器包装リサイクル協会(以下容リ協)ルートで仕入れるリソースガイアが並列していましたが、資源物リサイクルセンターの老朽化をきっかけに市との話し合いが持たれ、容リ協ルートとして同社に一本化されました。

品質維持へのこだわり

「品質向上を常に意識し、仕入れ先や販売先メーカーとの情報交換を重ね、年々良い商品を作ることができています。松戸市はラベルのない使用済みPETボトルが多くて助かっています。市がいち早く啓発活動を始めたお陰です」と岡部氏。

大きな取引先のひとつであるシートメーカーからは大変高い評価を得ています。「品質さえ維持していれば返品もありません」。



同社で製造されたフレーク



同社で圧縮梱包されたペール品

とはいえ一部集合住宅から出たボトルはラベルが付いていることが多く、コンビニからの回収分などは、せっかくキャップとボトル本体を分けてもボックスの中で混じってしまうなど問題もあります。

入札制度への備え

当工場の年間処理量は、約2,000トンあり、ここ数年、全量が容リ協から委託を受けています。

しかし容リ協で落札出来ない年があり、原料である使用済みPETボトルの調達に困り、古物商の資格をつかった「不要品買い受け」という形で入荷したこともあります。「当社は明治期に古紙のリサイクルで始まった会社。リサイクルが止まったらどうなるか、という怖さは古紙の時代から知っています。リサイクルをビジネスと捉えず、血が通った考え方をしているのです」と岡部氏。

製品の出荷の三本柱は成形、シート、繊維ですが、再生利用品をもっと使って欲しい、という強い言葉が印象的でした。



工場内を見学するRING編集委員



左写真より新井氏、富塚氏、岡部氏、樋口氏

代表取締役 新井勝夫
執行役員本部長 岡部 章
営業部長 富塚幸雄
松戸工場工場長代理 樋口拓也

分別収集にご協力ください

※市町村の分別方法にしたがって排出してください。

PETボトルの識別表示マーク



：ボトル
PET



清涼飲料・酒類・乳飲料等の飲料用、しょうゆ等の特定調味料用のPETボトルには、ラベル部分やボトル本体にこのマークがついています。
マークがついている容器などと分別して排出してください。

(参考)プラスチックの識別マーク

指定表示製品(飲料、特定調味料)以外のPETボトルおよびプラスチック製ボトルにこのマークがついています。



1 キャップは必ずはずして、ラベルはできるだけはがしてください。



3 横方向につぶしてください。



※つぶすとラベルがはずしやすくなります。
※取り外しにくいしょうゆボトルの中栓や、キャップをはずした後に残るリングなどは無理に取る必要はありません。そのまま排出してください。口元の白い部分もPET樹脂です。

2 中をすすいでください。



4 市町村のPETボトル収集日に排出してください。



自然と社会と人間との調和を目指す、 環境活動の草分け的存在



江戸天保期、京都伏見で創業した宝酒造株式会社。その老舗酒造メーカーの中で、最大の生産量を誇るのが松戸工場です。1964年、それまでの王子工場と市川工場を集約し、「宝焼酎」と「酒類用アルコール」を主要製品として、操業を開始しました。宝酒造では最大で、国内でも有数の蒸留能力をもつ最新鋭の連続式蒸留機を所有。品質にこだわりながら165,000kℓの酒類製品を製造し、全国各地のお客様へお届けしています。

自主設計ガイドラインに準拠した 酒類PETボトルへの取り組み

宝酒造が酒類PETボトルを扱い始めたのは、1985年。焼酎の大容量化をPETボトルで実現したのが始まりです。強度、持ち運びやすさ、注ぎやすさを考え、取手つきでスタートしました。

その後「指定PETボトル自主設計ガイドライン」が制定されたことにともない、1998年に、酒類業界としては初めて同ガイドラインに完全準拠したPET

ボトルを開発。2.7ℓのボトルは取手をなくし、4ℓのボトルは取手をPET樹脂に変更。また、ラベルもはがしやすいものに切り替えるなど、リサイクルのしやすさを向上させました。変更の

際には、資材メーカーと緊密な連携を図り、強度テストや輸送テスト、実際にお客様に使っていただくユーザーテストなどを積み重ね、万全を期しました。

4Rとして、 「焼酎のはかり売り」を推進

宝酒造では、3Rにリフューズを加えた4Rに取り組んでいます。リフューズ、つまり空容器の発生回避のための手法は「焼酎のはかり売り」。工場は、焼酎を200ℓ、1kℓの専用タンクに入れて販売店に直送。お客様は、家庭にあるPETボトルなどの空容器を持ってきて、販売店が容器を洗浄。お客様はその容器に必要な分だけ入れて購入するという、酒類



工場内を見学するRING編集委員

の昔ながらの販売手法を現代的にアレンジしています。1998年にスタートしたこのシステムは「容器のごみが出ない」「欲しい量だけ購入できる」と、お客様から好評いただいています。現在では、協力店舗が全国約200店舗にまで拡大。この取り組みによって削減できたPETボトルは、2.7ℓボトル換算で累計659万本にまで達しました。また、段ボールも約165万枚節約することができています。

宝酒造の原点、「宝」は「田から」

古くから、自然が育んだ田畑の恵みを「宝」としてきた日本人。その字を社名に冠した宝酒造では、小学生のお子様のいる親子を対象に、自然の恵みといのちのつながりを学ぶ「田んぼの学校」を2004年より実施しています。

参加者は、自分の手で苗を植え、草をむしり、稲穂を刈り取って収穫したお米（もち米）が“おもち”や特製本みりんになるまでを体験。でき上がった特製本みりんは、子供たちの手描きのオリジナルラベルを貼った壺に詰められ、参加者のもとにお届けします。2010年までは千葉県田んぼと松戸工場で実施していましたが、現在は本社のある京都で実施しています。移りゆく季節に応じて、



人部氏

変わっていく田んぼまわりの自然環境を観察して目を輝かせる子供たち。「参加した子供の笑顔に、私たちが感動するんですよ」と語る人部氏。

工場で働く皆さんの制服の右腕には、PETボトルリサイクル推奨マークが輝いています。

松戸工場 執行役員 工場長 渡辺 西造
松戸工場 工場管理部長 松永 正樹
松戸工場 生産技術部長 吉濱 義雄
環境広報部 副部長 人部 恭造



↑写真左から吉濱氏、渡辺氏、松永氏
制服の右腕についている →
PETボトルリサイクル推奨マーク

企業による 自然保護活動支援の先駆け

古くから自然を大切にしてきた宝酒造では、1979年、北海道の豊平川にサケを呼び戻そうという市民活動「カムバックサーモン運動」に協力。企業の自然保護活動支援の先駆けとなりました。以来、各地でさまざまな活動を支援しています。

また、経済活動の成果を表す「黒字」「赤字」に対し、宝酒造では環境活動の成果を「緑字決算」として独自に数値化し、1998年から公表。企業がISOに取り組み始める以前から、自社の環境活動を明らかにしてきました。

松戸工場では、製造工程で出る“酒粕”や“みりん粕”を動物の飼料として活用。また、場内全てのボイラーの燃料を、2006年より重油から天然ガスに転換。さらに、排水処理設備の汚泥を乾燥させて粉末にし、肥料として販売するなど、環境活動に積極的に取り組んでいます。

<概要データ> 宝酒造株式会社 松戸工場 〒271-0052 松戸市新作字高田111番地 TEL.047-362-0261 FAX. 047-361-1600

■ 操業開始 1964年6月

■ 敷地面積 130,541 m²

■ 年間生産量 165,000 kℓ

■ 生産品目 焼酎、チューハイ、本みりん、清酒、梅酒、ウイスキー、ブランデー、酒類用・工業用アルコール



再生樹脂利用事業者紹介

「変わることのない価値」を世代や国を越えて提供し続ける

カルピス株式会社

本社 〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南2-4-1
TEL: 03-5721-3111 (代)
群馬工場 〒374-0072 群馬県館林市新田町166
TEL: 0276-73-5111



Welch's(ウェルチ) 800g PETボトルシリーズ

「Welch's」(ウェルチ)ブランドに再生ラベルを積極的に導入

大正期に創業したカルピス株式会社。創業者の三島海雲は内モンゴルの地で酸乳と出会い、乳酸菌こそおいしさと健康の源だと確信。乳酸菌を活用したロングセラー飲料「カルピス」の開発に取り組み、今に至っています。

2009年3月より、同社の主要ブランドのひとつ「Welch's」(ウェルチ) 800g PETボトルシリーズの商品ラベルには、PETボトル再利用材料が使われています。PETボトル再利用材料を使用したラベルは皺が寄りやすく、規格通りのラベルが安定して生産できるようになるまで、工場で試行錯誤を繰り返しました。ラベルの薄肉化などさらなる挑戦も視野に入れている様子。PETボトル再利用材料をラベルとして採用している事例はまだ少なく、カルピス社の積極的な姿勢がうかがえます。

「PETボトル再利用材料を使っている製品が当社以外にもさらに増え、ますますPETボトルリサイクル推奨マークが消費者に認知されることで『ウェルチも使っているんだ。』という認識がされるようになってどんどん広がっていけばありがたいと思います。」と商品開発を担当する河口氏。

現在再生ラベルは「Welch's」800g PETボトルシリーズのグレープ、ピンクグレープ、オレンジ、アップルの4品種と年数回の期間限定品で展開しており、2010年度のPETボトル再利用品カタログでも紹介されました。さらなる拡がりに関してはまだ未定とのことですが、すこやかな飲料のメーカーらしく、再生ラベルなど環境に配慮した動きは今後も重視していくとのことでした。



Welch's(ウェルチ)の製造ライン



工場内を見学しながら説明を聞くRING編集委員

「おいしくて健康的な飲み物」の会社だから

カルピス社は目に見える環境保全活動を推進するため、国際規格ISO14001の統合認証を取得しました。群馬工場では社員の発案による手作りピオトープでのクロメダカ(絶滅危惧種)育成と近隣の学校への寄贈、市の呼びかけに応じて4年前から取り組む“緑のカーテン”事業(4年連続市長賞受賞)など、地域社会へ貢献するため地道な活動に取り組んでいます。

美味しいこと、カラダに良いこと、安心感のあること。三島海雲の言葉である「変わることのない価値」を、世代や国を越えて提供し続けるため、同社は環境活動においてもさまざまな取り組みを進めています。

群馬工場長 白柳 寛
群馬工場 次長 大高 謙司
広報・CSR部統括マネージャー 大石 芳弘
飲料事業部 商品開発グループ アシスタントマネージャー 河口 文彦
品質保証・環境部 環境グループアシスタントマネージャー 佐藤 幸一



写真左より 大高氏、大石氏、白柳氏



写真左より 佐藤氏、河口氏

INFORMATION

- 2012年PETボトル・プラスチック容器包装リサイクル
市民・自治体・事業者の意見交換会
(第1回神戸、第2回札幌)が開催されました。
次回 2012年10月予定 第3回 仙台

- CAN ART FESTIVAL2012に出展しました。

期間:2012年9月15日~17日
場所:北海道小樽市

- 第14回エコプロダクツ2012に出展します。
期間:2012年12月13日~15日
場所:東京ビッグサイト

PETボトルリサイクルについて、より広くご理解いただくために各種PR品をご用意しています。ご用命の際は、当協議会事務局までお気軽にお問い合わせください。



編集後記

今号の特集では麴谷氏(グリーン購入ネットワーク専務理事・事務局長)からお話を伺いました。グリーン購入ネットワークでは、環境配慮製品の積極的な情報発信を行っています。弊協議会もその必要性を痛感しており、今後何らかの連携が取れば良いと考えております。市町村紹介では、豊田市と松戸市をご紹介しました。豊田市では独自のエコポイント制度を作り、市民へ啓発活動を行っています。松戸市ではマスコットキャラクターの「クリンクルちゃん」を作り、市民に対するリサイクルの促進を図っています。

各主体がそれぞれの立場で市民と連携、協働して環境活動を推進しています。(T)

PETボトルリサイクル推進協議会 会員団体

一般社団法人 全国清涼飲料工業会
PETボトル協議会
社団法人 日本果汁協会
日本醤油協会
酒類PETボトルリサイクル連絡会